

俳人成田千空研究会

千空研究

第19号

野も山も青し天間のみよ子欲し

—千空句版画—

藤田 健次



成田千空句「野も山も」Kenji 藤田
 参考: 講談社「道輪の世紀」写真—渥美武文氏

「天間のみよ子」とは、旧上北郡天間林村に
 実在した女性である。南部地方の盆踊り歌に、
 「おやし貫てけだかが欲しぐない。ならば天間の
 みよ子欲し」とうたわれている。この歌詞は、
 遠くは下北郡佐井村を始め、各町村に広まって
 いる。本名は附田みえ。昭和35年に70歳で亡く
 なった。こうして、今も民謡などに登場して、
 たくさんの男性の心を虜にした天間のみよ子と
 は、どんなに魅力的な女性だったのだろう。第
 3句集『天門』から。

(版画家・会員／八戸市)

目次

野も山も青し天間のみよ子欲し —千空句版画—	藤田 健次	1
新資料とともに(2)		
社会性俳句のブームの陰で	齋藤 美穂	2
宮川翠雨と暖鳥俳句(上)	西谷ともえ	3
千空先生に俳句を習う⑥		
一期の吟行、一会の座	世良 啓	4
座談会「千空研究—これまで・これから」 齋藤美穂・世良啓・西谷ともえ・佐々木達司		6
〈成田千空資料再録〉⑩		
特集 戦後青森県の文学状況 俳句界の動向		
千空 佞武多の俳句		12
〈作品鑑賞を読む〉⑩		
雨の日は雨を力に大青田	深谷 義紀	14
『成田千空伝』『合本成田千空句集』 出版記念会開かれる		15
寄贈感謝・会員名簿・北極星		16

千空研究会の事業

- ① 詳細な年譜の作成
- ② 千空俳句データベースの作成
- ③ 関係資料の収集
- ④ 関係者からの聞き取り
- ⑤ 会報『千空研究』の発行
- ⑥ 『評伝 成田千空』の刊行
- ⑦ 『合本 成田千空句集』の刊行

社会性俳句のブームの陰で

齋藤 美穂

成田千空と第五福竜丸被爆事件

千空の「一九五四年 新自由日記」には「ビキニ岩礁水爆実験」を詠んだ作品が残されています。1954年3月1日、米国が南太平洋で水爆実験を行い、操業中の漁船第五福竜丸が放射線物質を含む灰をかぶり死者を出した事件は、社会に大きな衝撃をもたらしました。以来、元乗組員らも参加しての核兵器廃絶運動は、危機感を高めながら現在まで継続されてきました。日記の俳句を初めて目にしたとき、千空が深い自省と決意をもって戦後を歩みだしたことを思いました。

ビキニの灰（抜粋）

いのち全き人我等憂き春の日々

牙ゆる詩欲し「灰」が骨髓浸す世ぞ

春月魄「死の灰」の元兇憎し

生々しい現実と感情を伝えている点が強く印象に残りましたが、自選句集には収められていません。当時俳壇で台頭していた「社会性俳句」に対する千空の捉え方を知る鍵になるのではないかと注目していたものです。

永沢耕子へ贈った一句

平成31年2月、千空研究会会員の鎌田義正氏所

蔵の短冊（写真）について佐々木達司代表から知らせを受けました。表には濃淡に彩色された3尾の魚と、「落鮎や水の段差の身にひびく」が二行にわたって認められ、画・文にはそれぞれ「葛西四雄」「千空」の落款が見えます。裏には「贈 永沢耕子 1952・7・18」とあり、他の直筆資料との比較から千空の筆跡と推測されました。



短冊 裏・表

この俳句はデータベースにはない初出句で、調査の手がかりは「1952（昭和27）年」のみでした。葛西四雄（現・平川市出身）はのちに日展審査委員も務めた画家で、北国の風土を描いた鮮烈な油彩は県内数箇所の施設に寄贈されています。永沢耕子は俳誌『暖鳥』に投句をする若き俳人でした。二人は同時期に結核療養所である浅虫の臨浦園に入院していたことが判りましたが、臨浦園を前身とする国立病院機構青森病院では古い資料は残されていないとのことでした。

千空から短冊を贈呈された永沢耕子とはどんな人だったのでしょうか。県近代文学館所蔵『暖鳥』（青森俳句会発行）の調査で浮かび上がった人物像は興味深いものでした。

雪落せば屋根の破れ現る

寒月に照らされ尿瓶のひもたぐる

永沢は当時有力な新人として期待されていました。入院中の臨浦園から投句を続け、園内俳句大

会も主催していたようです。昭和27年度の暖鳥選者を務めた千葉菁実は選評で「耕子の俳句——という言葉が生まれつつある。立って受けない。絶対に受けて立っている。油の乗り切ったところ」と述べています。永沢は27年9月号に「自己批判」と題していくつかの主張を掲げています。「文学の目的が真に人間生活のためであろうとするならば、社会政治と結びつき共に発展せしめる」。永沢は花鳥諷詠は軍国主義を賛美したと批判し、社会性が明白な俳句を目指していました。28年に同人に昇格し、2月号には「足踏状態」と題して先輩同人の新年号作品について批評を展開しました。

成田千空 難解句とカナフリのある句を多く作る人、「貨車」をそのまま「貨車」と読めないのかどうしても解らない私の未熟のためだろうか。「冬帽子馬具屋に忘れ来しと思ふ」の句はどうか誰かの評では「何でもなさそうで何かある」と云うのだが今の世の中では「何かある」で通らない。若しそう云うことが許されるならば「芸術は解らないところに良さがある」と云うことになりかねないからである。

永沢は千空の俳句に疑問を呈しました。『暖鳥』には高校生からベテランまで自由に議論する空気がありました。千空が日記に書き付けた「ビキニの灰」の作品を発表すれば、あるいは永沢を満足させたのかもしれませんが。しかし千空はそうしませんでした。

千空は『暖鳥』に集った高校生らにはがきを書くなど親身になって助言をしたといえます。寺山修司もそのひとりでした。新資料の短冊の真相は

わかりませんが、結核から生還した体験を持つ千空が、研究熱心な永沢耕子を見舞ったとしても不思議ではありません。

落鮎や水の段差の身にひびく

産卵のために川を下る鮎の重量感と豊かな自然の情景が伝わる一句です。病のために不自由な生活を強いられ、何らかの苦悩を抱えていたという永沢に、(君の句作の充実ぶりは届いている)と励ましたものでしょうか。自然をありのままに詠んだかに見える一句の解釈をめぐって二人の間にはどのような交感があったのか、興味をかきたてられます。

文学には自ら文学の道がある

千空は社会性俳句という「ブーム」に対して慎重でした。「文学表現はドキュメンタリーやポルタージュに向かない」という趣旨の文章が手記に残されており、俳句を文学として追求する以上直接的な表現によらない方法を模索していたようすが読み取れます。数日ごとに現れた「ビキニの灰」の作品は、一句でも目指す世界へ昇華させようとした試行の跡とも考えられます。

(千空研究会調査研究員／五所川原市)

宮川翠雨と暖鳥俳句(上)

西谷 ともえ

平成31年3月、書道の団体「雨声会」の書作展

で雑誌「書之友」が展示された。「書之友」は昭和26年4月、長庚会ちやうこうかいという、書家・鈴木翠軒が顧問で、彼の弟子らで構成する団体が刊行した月刊の競書誌である。宮川翠雨がその編集に当たっていた。A5サイズで20ページほどの雑誌で当時の「暖鳥」とほぼ同じような外観である。翠軒をはじめとする書家のお手本が掲載され、入選した青森市内の一般・高校生および小・中学生らの作品とその選評を掲載しているほか、翠雨はじめ書家たちの文章も掲載されている。書作展では全59号あるとされている本誌のうちこの度確認できた五十数冊が展示された。菊池翠汀会長が「書之友」を「暖鳥」の姉妹誌のようだと教えてくださった通り、雑誌の体裁だけでなく、エッセイや研究に関する文章を掲載しているなど類似点が多く見られ、昭和21年から続いている「暖鳥」が「書之友」を刊行する際のモデルとなったと言えそうである。

エッセイの執筆には翠雨本人はもちろん、長庚会員だったと思われる暖鳥同人の吹田登美子(暖鳥)主宰孤蓬ことうや千葉正實(俳号は菁實)のものもある。「書之友」は五年程で終刊を迎えるが、それは、青森で刊行されていたこの雑誌をモデルに翠軒が全国の門下生向けに創刊した「青雲」に協力するためであったという。地方誌をモデルに中央の雑誌が創刊されるという重役を担って「書之友」は廃刊となったのである。

さて、前置きが長くなったが、今回、この「書之友」を縁に菊池会長の仲立ちで翠雨邸に長女の弘子さんを訪ねる機会をいただき、弘子さんから著作のいくつかを賜ったこともあって、「暖鳥」創刊同人の翠雨と「暖鳥」、また千空さんについて何か書いてみようと思ったのである。以前「翠雨

雑記」(昭和53年8月 北の街刊)掲載の「暖鳥抄・批判と鑑賞」にある千空句評に他句と異なるものを感じたことがあった。詳細は後述するが、そのことも今回の執筆動機となっている。

まず、宮川翠雨の経歴について『翠雨雑記』『続翠雨雑記』(平成25年1月、雨声会発行。以下①)から引用しながら特に俳句を始めた頃に力点を置いて簡単にまとめておく。

宮川翠雨(本名、宮川武弘・旧姓伊藤)は大正元年9月28日、青森市生まれ。昭和7年青森県師範学校卒業。師範学校在学中、美術教師今純三に惹かれ、週に一度くらいの頻度で今を自宅に訪ね、絵以外のいろいろな話を聞いたという。「心の修行にも」と思って絵から書道をやりはじめた」と書いている。昭和14年には、県人初の明治神宮夏季大会(国体の前身)に出場した水泳選手でもあった。

卒業後、高松玉麗、花田哲行に俳句を勧められたが、自身「文芸の才の乏しいことを知っていた」ため、二人に内緒で東奥文芸に投句。「屋根からの坂となりけりスキーの子」が増田手古奈の選で天位となる。実は密かに自由律や短歌も嗜んでいたらしい。その後哲行の「ほそみち」の句会に出席するようになり、一年ほど後「石楠」の臼田亜浪が来青した際の俳句大会で、宿題の「とんぼうを囁んでしまひし馬の顔」が天位をもらう。書の世界に行き詰まりを感じていた頃でもあり、「俳句を本気でやって見ようかと思」い、臼田の「石楠」に入会した。

俳句を数年やったら今度は書の世界も見えてきた。昭和15年、書の学習のため上京を決意。記念に『向日葵』を千葉菁実、福田空朗、前田水馬らと七人の合同句集として刊行した。翌年4月、上

京し、秋には鈴木翠軒の門人となるが、間もなく開戦を迎え、「いつ召集になるかわからない状態」になった時、また、俳句で自分を表現したいとも考えるようになり、臼田を訪ねて指導を受けるようになった。

戦況が激しくなった昭和20年1月、県立青森高等女学校に赴任して吹田孤逢と巡り会い、以前の句友であった千葉らとまた交流が始まった。この頃千空さんと知り合ったものと思われる。青森空襲の夜の句会にも参加していた。昭和12年2月「暖鳥」創刊同人。創刊号の題箋は一冊一冊翠雨が手書きしたものである。その後青森高校に赴任し、文学部の顧問となる。生徒に寺山修司、京武久美、冬館子音らがいた。昭和28年「寒雷」に投句。昭和31年の「暖鳥」選者。43年日展審査員、青森県文化賞受賞、昭和48年「陸」同人、青森県俳句大会知事賞、49年青森県褒賞、54年「河口」創刊主宰、56年パリにて個展、60年句集『初硯』刊行、62年1月12日死去。日展評議員、翠心会々長、雨聲会主宰、現代俳句協会々員。弘前大学、岩手大学講師も務めた。

さて、先ほど書いた「暖鳥抄・批判と鑑賞」の千空評の部分引用する。

壱土一路飛ぶ乙鳥の腋鮮し

千空

この句が陳腐か斬新かにわかれるのは、腋鮮しをどう解釈するかにある。この句は何か斬新のよな印象を与えながら、この句を作った秘密工場は、案外古く、陳腐なのではないかと私には思われる。

それは、この句に生命の燃焼がみられないで、

そのポーズだけがあるからだと思う。少し率直な私の感じを大胆に述べすぎたと思うが、しかしそのことで傷ついたのは、この句ではなく、私の方かも知れない。

千空さんの「壱土一路」の句は、データベースによると昭和41年「暖鳥」掲載の句である。翠雨の評にしては非常に辛いというのが私の印象であった。翠雨の評は個人の句については一種の暖かさのようなものがあると思っていた。大抵は句の良いところを拾って褒める姿勢がみられる。例えば同じ稿の中で、橋川まもるの句については句の「いのち」が「ある程度成功している」としながらも「もう少し答えを出し惜しみするような感じが欲しい」と改善を求める。昭和31年「暖鳥」の選者を務めた際も、全体的な傾向については批判したが、個人句を強く批判することはなかった。今回の稿の末に「*この稿は、はじめ句だけを示し、あとで作者が誰かわかるような仕組みになっている。だから先達の句に失礼な鑑賞や批判していることがあとでわかって苦笑している。でも私はどちらかというと、作者がわからないで、鑑賞したり批評したりする方が、逆に自分が組板に乗っているようで面白い。」とある。もちろんその通りであろうが、この句の作者は、千空さんだと知って書いたに違いない。「陳腐か斬新」の「陳腐」だとする潔いほどの鋭い批判の後に「しかしそのことで傷ついたのは、この句ではなく、私の方かも知れない。」とそれまでの批判を打ち消して自分がよく解釈できなかったことの方を気にかけるのは、自分の思いを率直にぶつけながらも、千空さんの計り知れない句に対する思いを感じ

じていたからに違いない。

(県立青森高校教諭・元県近代文学館副室長／青森市)

千空先生に俳句を習う⑥

一期の吟行、一会の座

世良 啓

大学を出てすぐに教員になったが、授業すればするほど力不足を痛感した。国語教師になれば、国語とは何か、文学とは何かがわかると思っていたのに、文部省の指導要領も、教科書の指導書も、読めば読むほどわからなくなる。さらにすぐに役立つ進路対策の国語や学校業務の方が忙しく、教材研究どころではなかった。たった3ヶ月とはいえ、この育児休業中にも千空さんの俳句教室に行けなかったら、ずっとそんな調子だったかもしれない。

その育児休暇も終わり、いよいよ教室を去る日、千空さんは、投句だけでも続けなさい、と言ってくださった。続けることが大事だよと、俳句仲間の先輩方も言うてくださった。その頃まだ三〇代前半だった私は会の中でダントツで若く、随分かわいがっていただいた。

みなさんの優しい言葉に甘え、職場復帰後も、しばらく葉書で投句を続けていた。すると、全員の投句と点数を千空さんが鉛筆で書いたプリントのコピーが送られてくる。それを見ると、NHKの古びた教室で、毎回わくわくしながら俳句をつくったり、読み合ったりした幸福な時間を思い出して寂しくなった。私もあんな時間を生徒と過ご

したいと思っても難しく、忙しい現実が俳句の
ユートピアから私をだんだん遠ざけていった。

去る者は日々に疎し、である。

もうそろそろ投句は無理かもしれないと思いは
じめた頃に、「夏休みに吟行をするのでよかった
らいらっしやい」というお誘いがあった。8月9
日土曜日。会場は藤田記念庭園である。

その日も、あいにくの雨だった。

句会に出なくなって半年ちょっとなのに、まる
で何年も会わなかった人に再会したように「よぐ
来たねえ」「どしてら？」とみなさんに声をか
けられ、嬉しくて胸がいっぱいになった。

まずはしばらく歩き回って句を詠むんです、と
教えられ、庭で一度解散となった。

背が高く肩幅の広い千空さんは、大きな黒い傘
をさし、遠目にも目立った。その後ろをとぼとぼ
歩いていると、見たことのない（いや、正確には、
目に入っても気に留めたことのない）可憐な黄色い
花が固まって揺れていた。露のような葉っぱはつ
やつやと濃い緑色に輝いている。草花の名前にと
んと疎い私は、あれは何という花ですか？ と千
空さんに聞いてみた。

すると先生は、ん？ と身を乗り出し指さして、
「あれか？」

「はい」
「ツワブキだね」

ツワブキ……石菫というその名を初めて知った
この時の情景は、いまでも私の中に流れている。な
んでもない会話だったのに。

こうしてひととおりの句ができると、大きな古い
和風の広間で句会になった。ひとり三句だった。
焦りながら私が詠んだのは、

濡れ影を曳く松一本秋に入る
嵐前青松かきの雨滴る
傘傾け師は秋草の名を教ふ

「濡れ影」は0点。残り二つには3点ずつ入っ
た。「傘」の句を見た千空さんは、にやりとして
1点入れてくださった。きっとサービスだ。

この日の千空さんの句は、

盤石や雨もみどりの藤田邸
連衆や触れあひて咲く濃紫陽花
青梅雨に濡れきて我ら一会の座

「盤石」の句は8点、貫禄のトップだった。

残り二句は1点ずつと、点数は伸びなかったが、
いま読み返せばその光景が蘇る。……ああ、あの
とき確かに紫陽花の小さな花ひとつひとつみたく
に、みんな一座に仲良く集まって、濃密な時間を
過ごしたなあ、となつかしい。私たち生徒を「連
衆」「我ら」と呼んでくれた千空さんのあたたか
い心持ちも伝わってくる。「一会の座」とは「い
ちえのざ」と読んで、一期一会の集まり、という
ことだと千空さんは説明された。その言葉も今に
なって沁みる。

吟行とは、句ができていく過程も風景も時間も
共有するから、なおさら印象が強いようだ。そし
てこれが千空さんで行った最初で最後の吟行に
なった。

この日、選句に使った紙もノートにはさまって
いた。その端に千空さんの言葉を短く書き留めて
あった。

「あたりまえにならない、一点の発見が大事」と

書いて線で囲んでいるから、特に印象に残ったの
だろう。それから「ごとく」を句につかうのは難
しい、とか、あまり深入りしないこと、とメモし
てある。比喻に深入りしない、ということなのか、
いったい何に深入りしないのか、もうわからない。
さらに一戸謙三と船水清の話題になった。この
二人は津軽弁がうまいんだよ、と千空さん。ちょ
うど藤田別邸前には、岩木山の形をした一戸謙三
の「弘前」の詩碑があったので、思い出されたの
かもしれない。「実は私は一戸謙三さんに2年間、
詩を習ったことがあってね……」と、仰ったので
驚いた。

現在、青森県近代文学館で「一戸謙三展」を開
催している。今年（生誕一二〇年、没後三〇年、
初めての大きな展示だ。地方主義運動をはじめた
福士幸次郎が、高木恭造と一戸謙三に方言詩を書
くよう勧めたのだが、ただ方言で言葉を並べれば
方言詩ができるかといえば、断じてそんなことは
ない。恭造も謙三も優れた現代詩人でもあった。
彼らが津軽の言葉を使って詩をつくったからこそ、
あれだけの津軽方言が誕生できたのだ。

終生五所川原に暮らし、「風土俳句」という独
特の世界を切り拓いた千空さんだが、一戸謙三と
いう詩人にどんな影響を受けたのか。当時もっと
詳しく聞いておけばよかった、と思っても、あの
祭りである。

（文筆家・高校教師／藤崎町）

千空研究 —これまで・これから—



千空さんとの出会い

—— きょうは『千空研究』のレギュラー執筆者のお三方にお出でいただきました。座談会の形で研究会の歩みをまとめたいと思います。まず、自己紹介をかねて、千空さんとの出会いをお話ください。

西谷 青森の西谷です。平成25年4月に文学館に転勤して、何も知らないのに10月には企画展「成田千空」を担当しました。私の祖父は高木石阿弥という俳人で、自宅で「寂光」の句会を開いていたようです。そこへ若き日の千空さんが参加していたと知って驚きました。

齋藤 神奈川県出身ですが、結婚して五所川原に来てから30年になる齋藤です。文学館に勤務して

出席者

齋藤美穂さん

俳人成田千空研究会調査研究員

世良 啓さん

文筆家・高校教員

西谷ともえさん

県立青森高校教諭・元県近代文学館副室長

佐々木達司（司会・千空研究会代表）

4年目に企画展「成田千空」がありました。解説員でしたが、「永住の地・五所川原」を担当しました。義父（夫の父）は千空さんと五所川原俳句会の仲間でしたし、義母も千空さんご夫妻と付きあいがありました。「千空日記」には時々私の家族も出てきて、交流のようすを知ることができました。

—— 齋藤さんは、生前の千空さんとは面識がなかったんですか。



齋藤 自転車に乗った姿をお見かけしたり、義母の用事で書店へ行くことはありましたが、私は千空さんに直接お目にかかったことはありません。義父は7年前に亡くなりましたから、生前に千空さんのことを聞いておけばよかったです。今考えると残念です。

—— 齋藤さんのご夫君が子どものころ、兄さんと二人で新年に千空さんのところへ破魔矢を届けに行ったことなど、日記に出てきますよね。

齋藤 夫は父と千空さんの関係を詳しく知らない

まま、お年始へ伺っていたそうです。父の使いで来る子どもたちを見守ってくれていたのでしょうか。兄と二人を詠んだ俳句をいただいたこともあるんですよ。

世良 藤崎の世良です。五所川原高校の教員をしていたとき、千空さんがご講演にいられました。生徒に、俳句のことや太宰治、寺山修司のことを話してくれました。その後、育児休暇を利用して弘前のNHK文化センターの俳句入門講座に3カ月だけ通いました。

—— 俳句のお弟子さんは世良さんだけです。

世良 五所川原高校にお出でになったときも、俳句をやっている教師が「この人はすごく偉い先生だ」と言っていたので緊張していたんですが、そんな雰囲気ではなかったんですよ。俳人の概念が変わりました。

—— 千空さんの人柄でしょうね。

世良 私を除いてお二人は、気付かないうちに千空さんが身近なところにいたということですね。西谷さんはお祖父さんが一緒に句会をやっていた、齋藤さんは夫の両親が俳句仲間だったとか、それがお二人の研究の原動力になっているような気がします。

—— 私は昔、同人誌『津軽文学』の編集をやっていた、桜桃忌文芸の俳句選者を頼みに行ったのが最初でしたから、亡くなられるまで47年の付き合いがあります。千空さんが青森県文芸協会の理事長をしていた22年間は事務局を担当していましたから、いつも相談に行っていました。ただ、俳句には仲間がたくさんいるので、私は関わらないようにしていました。千空俳句を真剣に読んだのは研究会を始めてからです。

齋藤 昭和四十年代の俳句仲間の写真に義父も千空さんと一緒に写っています。義母は会員ではなかったのですが、大会があると手伝いに行って「みんなが喜んでくれた」とか、楽しそうでした。受賞や句集の出版などは皆で出席してお祝いしていました。これも千空さんのお人柄でしょうか。

西谷 それは千空さんが青森俳句会で育てられたからでしょうか。先生の言うことに逆らえないような俳句会はだめで、自由に言いあって(戦時中の物のない時代に)砂糖なめて、俳句をやって、それがよかったですよね。

—— 青森俳句会は楽しい、いい集まりだったんでしょうね。

世良 俳句の世界はもっと厳しいものと思っていましたが、千空さんの教室では師も弟子もなく和気藹々とやってきました。それこそ正岡子規たちがやりたかった俳句なんですよね。俳句革新とは別に偉くなるためなどではなくて、人と人が本気で競い合いながらも和やかにやることではないかと。

企画展「成田千空」のこと

—— 没後七年目に開かれた青森県近代文学館の企画展「成田千空」はとても斬新でした。私は最終日に見学させていただきましたが、千空再発見の機会になりました。その帰りに「千空研究を始めるには、千空を知る人たちがいる今しかない」と思い、勝手に千空研究会を立ち上げました。あの企画展をきっかけに千空研究がスタートしたとも言えるわけですが、企画展はどのようにして始まったのですか。

西谷 先ほどお話ししたように、私は4月に高校か

ら文学館に転動しました。10月からの企画を担当することになり、「成田千空をやれ」と言われて戸惑いました。千空さんのことも知らなかったんですから。それで、エッセイ集『俳句は欲びの文学』を手かがりに資料を集めました。千空さんはいろんなことを書いていますので、これを並べて回顧展にしたら面白いかな」と思いました。萬緑で活躍するようになってからの千空展では、俳句を知らない私にはできないので……。

齋藤 西谷先生が、成田千空のキーワードを一つずつ拾って、展示資料と解説パネルで順序よく構成してくださいましたよね。

西谷 それに、青森でやるからには、青森の千空を展示できたらと思えました。それと齋藤さんには五所川原を分担してもらいました。そのお陰で出来たようなものです。

—— お父さんが集めた資料が役立ちましたね。まさか、娘のともえさんが使うとは考えなかったんでしょうね。



西谷 千空俳句最初の資料『寂光』を探しましたら、たまたま私の父(高木達)が寄贈した祖父(高木石阿弥)のものでしたので、ふしぎな縁を感じました。父は退職してから家系のことなど調べていました。3歳か4歳のころに祖父を亡くしていますので、懐かしかったんですね。祖父の俳句のことなどいろいろ話してくれましたが、忙しくて上の空で聞いていました。その父も亡くなって、話を聞いておけばよかった

と後悔しています。

—— その資料が文学館に寄贈され、最初の仕事で使われたわけですね。それはまさに運命ですね(笑)。西谷さんがそんな短期間で仕上げた展示だとは思いませんでしたよ。企画力、展示力、これまでの展示と違ったものを感じましたから。

西谷 県立美術館から来られた飯田高登室長の助けがありました。美術統括監督だったので、私の考えたことを展示のかたちにしてくれました。千空さんはただの堅物俳人ではなくて、何を取っても面白いんですよ。俳句一つひとつがすんなり心に入ってくるような気がしましたので、あえて俳句の解説はしませんでした。



世良 俳句は半分読み手に預けているものだから、確かにその人なりの解釈でいいんじゃないんですか。

—— 展示の仕方次第で大きく変わりますね。絵画でも解説文を読む

よりも、自分の感性で捉えた方が印象に残りますよ。自分なりの鑑賞でよいんじゃないでしょうか。何度も読むとより深く味わうことができますよ。齋藤 私は西谷先生のご提案で、「永住の地・五所川原」を担当しました。前年、ダンボール箱に入った未整理の千空資料を見る機会がありました。個人的な興味もあって家族や関係者から話を聞いていましたので、これが役に立ちました。文芸協会理事長としての千空さん、とくに「千空対談」(『文芸あおもり』連載)に興味をもちました。取材をもとに青森県文芸協会理事長として活動した千

空さんについてまとめました。五所川原にはともに歩んだ仲間たち、千空さんが尊敬した人物、千空さんを支えた人々の存在があります。この年、文芸協会が解散し、『文芸あおもり』終刊号を展示できたこともひとつの縁だったと感じています。

—— 齋藤さんは千空さんの取材に何度か来られましたね。まるで、仕事を越えて千空にのめり込んでいるようでした。私はそんな齋藤さんに興味を持ちました。これだけ関心があれば評伝が書けるだろうと思って、千空研究会発足の相談をしました。それがあればなんとか乗り越えられるだろうと……。

齋藤 千空さんはじめ街の人たちの別の顔が見えてきておもしろくて仕方がなかったのです。

西谷 県の近代文学館の企画展がきっかけで千空研究会が出来たことは、県職員である私たちにとっても最高の喜びでした。

—— 文学館でなければ出来ないことが多いのですが、民間と協力していければいいですね。それで、企画展の反応はいかがでした。

西谷 若い女の子が来たんですよ。センクウと読めなくてチソラさんのイラスト展みたいなものだと思っていましていいんです。初めて千空の俳句に触れたと言って感激していました。

齋藤 斬新なポスターに表徴されたように、飯田室長と西谷先生の企画には、これまでにない発想力を感じました。

西谷 でも、千空さんならもつと受賞歴のことなど展示すべきだろう、これでは物足りない〜と思っただけのおられたのではと思います。

—— 全部の人を満足させることはできません。

総花的にするより、的を絞った方がよいですよ。企画展はこれまでにない新しい感覚でしたからね。あれでよかったと思いますよ。

会報「千空研究」のこと

—— あの展示をきっかけに、俳人 成田千空研究会が始まりました。実は千空さんと冗談を言いあっていたとき、「私が死んだら、千空研究なんて始まるのかな」なんて言うもんだから、「それは始まるよ。……私が評伝を出すから」と言っただけです。だから「瓢箪から駒」ではなくて冗談から評伝です。

世良 そんなことがあったんですか。

—— ところで、会報『千空研究』はどう思いますか。みなさんは執筆者でもありますから微妙ですが……。

西谷 会報の表紙の版画がいいですね。全体を柔らかくしていますね。

—— 最初は写真を使いましたが飽きてきたし、藤田健次さんに「千空さんの句を作品にしてみないか」と頼んだんですよ。前から山頭火の句を版画にしてみましたから。彼が句の印象を自分の作品にするわけですから、これも一種の本歌取りでしょうかね。

世良 千空さんが投稿していた『月刊東奥』の方言詩なんかも興味ぶかいですね。戦前の雑誌を見ることがないので、会報に掲載されてよかったですね。

齋藤 「回想の成田千空」は、書き手のさまざまな思いが胸を打つものでした。ブックレット『わが心の千空』となったことで、よい資料にな

りました。千空に関わるさまざまの事実があらわになって証言集としても貴重だと思います。多面的な千空像が立ち上がる面白さがありますね。

—— 最初は俳人よりも他のジャンル、町の人や絵画の人に書いてもらったんですよ。俳人の書いたものは雑誌などにたくさんありますが、町の人たちが千空さんをどう見ていたかは（今聞いておかないと）という思いがありましたので。後に調査・研究に軸足を移しました。西谷さんや齋藤さんなど、企画展に関わった方々に執筆していただいたことがよかったです。それに県近代文学館OBの館田勝弘さん、米田省三さんが参加してくださったのは、とても力強かったです。それに文学館の方々にも『暖鳥』誌の撮影ではたいへんお世話になりました。

西谷 文学館にとっても、民間の団体と協力しあうというよい関係ができたと思います。

—— 研究会は評伝のために立ち上げたもので、会報『千空研究』は文学館や新聞社などに送るだけがいいと思っていたんですが、千空さんの思いを書いてもらったり、読みたい人に届けるために会員を募りました。ふつうの会と違い、会報を読むだけしか利点はありません。10人か20人もあればと考えていましたが、64人にも増えてびっくりしています。

齋藤 会員の皆さんに感謝ですね。

—— 『千空研究』はネットでも公開していますし、コピーしやすいように綴じていません。

若き日の千空さん

—— 若いころの千空さんは店番をしながら原稿

を書いていましたから、近寄りたがたい雰囲気でした。藤田健次さんも高校生のころ、店に掛けている絵が気になって、「誰の絵か、聞こうと思ったがとうとう聞けなかった」と言っていました。

世良 そんな感じだったんですか。

—— 千空さんは町の人には優しかったと思いますが、一世代下で生意気だった私にはガチンとききましたよ。私も「桑原武夫の『第二芸術論』をどう思うか」なんて挑発するものだから「(俳句で)手を汚したことの無い人に言われたくない」と反論するわけです。

西谷 千空さんは他人に影響されるようなイメージがなかったんですが、草田男と太宰の影響を受けていますよね。「はまなす紀行」は俳句を纏めて作る最初だったんですよね。太宰の『津軽』の跡を歩きながら太宰とは違うものを創っているんです。

齋藤 そうですね。太宰に触発されて竜飛崎へ単独吟行し、39句を『暖鳥』に発表していますね。

とらつな かみそ
纜や上磯一と曲に夏の気運

『地霊』

千空さんは「風土性という感性が自分の内部から掌握されて出て来た」(『文芸あおもり』153号)とっています。

—— 紀行と俳句は違いますが、太宰の跡をたどりながらそれを俳句にするのではなく、異なるものをめざしていたと思います。三厩で太宰が泊まった奥谷旅館に泊まっていますね。西谷さんが宿帳で突きとめました(『千空研究』第16号)。

世良 太宰の泊まった宿ですか。思いが伝わりますよね。

—— 千空さんは草田男にこんなことを言っている

るんですよ。「あなたと太宰治は本当の文学者だと思う」と。そういう意味では千空さんも俳人というより文学者ですね。いろんなものに関心があっているんな本を読んでいます。哲学とか詩学とか、それが千空俳句の魅力になってるでしょうね。草田男が現代俳句協会と袂を分かって俳人協会を立ち上げたとき、萬緑の同人はこぞって俳人協会に入りましたが、千空はこれと合流せず草田男と疎遠な時期がありました。

齋藤 日記を読むと、「伝統だの前衛だのと言って地方の句会を分裂させたくない」という千空さんの気持ちがよく分かりました。

『中村草田男訪問記』『千空句帖』
『わが心の〈千空〉』がブックレットに

—— 千空が昭和24年に中村草田男を訪ねたときのノートが出てきました。本屋を開くにあたって東京の取次会社と契約に行くわけですが、そのとき草田男を訪ねるわけです。「中村草田男訪問記」だけを『暖鳥』に発表していますが、全体は太宰を意識した私小説です。上京の折りに幼なじみのAちゃんと会うが結婚を断念する、美術館では俳句仲間の書家宮川翠雨に会い日展入選のお祝いを申し述べるなど、興味深い内容です。ブックレットにはその両方を収めました。

西谷 青森県の文学者はみんな私小説を書いていきますね。日記のような、小説のような、そんな流れがあるんでしょうね。

世良 興味ぶかいですね。

齋藤 昭和20年、戦時下にまとめた『千空句帖』はこれ以上ない資料です。西谷先生の解説文が付

けられて出版されたことで血の通った読み物となりました。

—— 戦争中は青森大空襲もあり、死も覚悟していたでしょうから、〈千空さんは生きた証し、遺稿集として残したかったのかな〉と思っています。

西谷 「千空句帖」は千空俳句の原点でしょうね。これは埋もれさせてはいけないと、文学で青森を応援する会が出版しました。

—— さきほどの話にもありましたが、会報の「回想の成田千空」は、ブックレット『わが心の〈千空〉』になりました。これを読むと千空の姿が浮かびあがってきます。

新走り市井に老いて悔いもなし 『十方吟』

酒が好きで、佞武多が好きで、俳句ひとすじに、清貧に生きた姿が伝わってきます。市井に生きた千空についての証言集です。

西谷 千空さんはいろんな面を持っているんで、いろんな方が書いて下さったんだと思います。

世良 草田男の炎熱碑を建てたときに参加したんですが、いろんな方がいて楽しかったですよ。

『成田千空伝』出来る

—— おかげさまで『成田千空伝』と『合本 成田千空句集』発刊の見通しが立ちました。まだ本は出来ていなんです(その後4月に発刊)、ここに2冊の校正刷りがあります。チラと見て下さい。

西谷 わーすごい。

世良 初学と療養の日々、飯詰村での帰農生活、生涯の師・中村草田男……、目次を見ただけでも興味ぶかいです。五所川原に住みながら中央で大

きな業績を上げた千空の大きさや深さが描かれて
いますね。

齋藤 初めは「評伝」はあまりにも責任の重い仕事だ」と思いました。でも、「偉人伝ではなく、自分が知らなかった千空さんを調べていこう。そんな興味・関心ならば書けるかもしれない」と思いました。「五所川原の千空について書きたいんです」と言うと、佐々木さんが「それでいいよ。それでいこう」と言ってくれたので、書き上げることが出来ました。それに、研究会があつて、会報『千空研究』がありましたら、みなさんの記事にも励まされました。関係者に直接伺った話や貴重な資料をもとにした記録として残ればうれしいですね。

—— 齋藤さんの興味・関心が、千空がいたころの町の様子、出会った人々などにどんだん広がっていったって、どうなることかと心配しました。でも纏まってよかったです。

齋藤 私は俳人ではなく土地の人でもありませんから、知らないことも多かったのですが、驚きや疑問から新たに見えてきたものもありました。五所川原の仲間たち、千空さんが尊敬した増田桓一、それに千空さんを支えた人々の存在がありました。さまざまな受賞歴を持つ偉い俳人というよりも、人と社会に交わり俳句を詠み続けた千空さんを書きたかったんです。『文芸あおもり』の千空対談で、千空俳句の土壌の豊かさを知りました。企画展の年、文芸協会は解散し終刊号を展示できたこともひとつの縁であつたと感じています。

—— 齋藤さんの取材はすごいですよ。市子夫人から20回の聞き取りをしていました。千空を毎日見ている人の貴重な証言ですが、評伝に生かせるのはごく一部です。それで、「妻・市子が語る千

空」を別章として付けました。取材した人は44名にもなりましたし、俳句文学館や日本現代詩歌文学館にも出かけています。

齋藤 市子さんの話をそういう形で生かされたのは嬉しかったです。

—— 千空の評伝はこれからも書く人が出ると思います。中央の俳壇のことは書いても、地元の千空について知る人がいなくなりそうですから、この本を抜きには書けないことになります。

齋藤 書き始めてから5年になりますが、その間に亡くなられた方もありましたから、やってよかったです。

—— 書きたいことはたくさんあつたと思いますが、絞ってこれだけにしたわけです。書名は悩みました。『成田千空伝』としました。堅いので副題に、『地霊』から、

大粒の雨降る青田母の故郷

を入れました。

齋藤 元の句は「故郷」ですが、千空さんは後に「くに」と書くようになりました。書名もそれに合わせて「くに」としました。

—— 句碑ではさらに「雨ふる」としてありますが、評伝の副題「大粒の雨降る青田母のくに」は角川の『合本歳時記』から採りました。千空さんは発表のたびに表記を変えていますよ。どうしたら読み手に伝わるか、試行錯誤を繰り返していたのだと思います。

6冊の句集を合本に

—— それと併せて、千空さんの6冊の句集、『地

霊』『人日』『天門』『白光』『忘年』『十方吟』、それと没年の作品を俳句雑誌から収録して、『合本成田千空句集』にしました。調べものをしても、句集や雑誌を広げていると仕事がかどらないんです。〈合本があれば便利だろうな〉と考えて、市子夫人の承諾を得て、『成田千空伝』と一緒に出すことにしました。それに総索引を付けました。

西谷 これだと句を自由に探せませんね。

世良 わー、ほんとだ。索引はあいうえお順に……これは宝物です。

西谷 ありがたいですね。

—— 合本だから簡単だと思ったのが間違いでした。索引に手間がかかりました。困ったのは語句の読みです。五月は「ごがつ」「さつき」、暮も「がま」「ひき」とも読めます。千空さんはこだわるところにはルビをつけていますが、読み手に任せている部分もあります。読みが決まらないと、索引はできません。

齋藤 燕も乙鳥の表記もありますし、読みも「つばめ」「つばくろ」「つばくら」「つばくらめ」と、いろいろですよ。

—— 私は俳句をやらないので、俳人に助けを求めましたが、それでも間違いはあると思います。

暮鳴いて孤島のやうな大藁屋

『地霊』

暮は「ひき」と読ませることが多いようですが、俳人の夏井いつきさんは、千空のこの句は大藁屋に対応して「がま」と読むべきだろう、と言っています。

齋藤 俳人として、また読者として、千空の俳句を味わう時に、6冊が合本になっていると助かりますよ。

世良 よくやりましたね。

—— 千空さんは20歳から俳句を始めて86歳まで67年間の作品があります。戦後の国語改革、新漢字・新仮名遣いがあり、活字もいろいろ変わっています。最初の句集の表記を尊重しようとする、活字のハネとか、テンが微妙に違っているものもあります。それを1冊にし、統一した索引を作るのは、校正の担当者泣かせでした。

齋藤 索引だけでも大変です。読みの問題もありますし、どう並べたら引きやすいのか。

—— 引くときは語句を探すと思うんですよ。太陽でも、「日」「陽」「旭」の表記があります。五十音順にするとバラバラになってしまうので、なるべく纏めるようにしましたが、〈引く人にとって、これでよかったのか〉という思いはあります。

西谷 それは大変ですね。

齋藤 これから千空の魅力は作品で伝えていかなければならぬと思いますから、合本句集ができてよかったと思います。俳句を作らなくても、俳句を文学として読むおもしろさも伝えたいです。特に若い人に読んでほしいですね。

千空資料のゆくえ

—— 4年前に、西谷さん、齋藤さんと私が、千空宅から研究会にたくさん資料を運びましたね。1000点ほどの本や雑誌、日記や写真などです。これは研究にずいぶん役立ちました。特に日記や句帖など自由に見られたのはすごい幸運でした。公刊資料では知ることのできない、千空の内面が秘められていました。「最終的には県近代文学館に寄贈したい」という、市子夫人の希望もありま

すので、今後はこれを整理していきたいと考えています。それと、会報『千空研究』は将来も研究資料として利用されることを願っています。

西谷 資料が寄贈されても、その整理、カード作りなど大変です。文学館も日常的に忙しいので……。

—— 本や雑誌はすぐに寄贈できますが、問題は書簡・日記など手書きの資料です。判読困難なものが多いので、できれば活字にして一緒に納められればと考えています。こちらにもデータが残ることになりますし。

齋藤 そうなればいいですね。

世良 研究会に関わったことで千空さんを深く知ったのはもちろんですが、研究なんかもううふうにやっていくんだな、ということを感じました。

—— これは自己流です。資料を集め解読する、聞き取りをして文字化する。それを公表していく。すると情報が集まるんです。それと並行して原稿を書いていく、という両面作戦です。

世良 すごく新鮮な感じがしました。

千空研究のこれから

—— 評伝、合本句集ができて、5年間の活動をもって研究会も今年で終わりますが、今後、千空研究はどうなると考えられますか。

西谷 そうです。このまま終わるのは残念ですね。みなさんがせっかく千空研究を続けて来られたのですから、会がなくなっても継続して研究し、発表して欲しいですね。

世良 考えていきたいです。研究会があったから

私も書いたわけですし発見がたくさんありました。—— それに俳句のつくり手、読み手ですが、これからのようになると思っていますか。

世良 俳句甲子園なども出来て、すごく若い人が俳句に関心を持つようになりました。三浦雅士さんが数年前に「小説の時代は終わった。これから俳句・短歌の時代が来る」と仰っていたことがありました。

—— 俳句は定年退職してから始める人が多いようですが、高校生が俳句に興味を持ってくれるのはうれしいことですね。

世良 それに、太宰治も寺山修司も俳句をやっています。2人も俳句の面で見直されています。

解説なしの俳句は前衛絵画のようで分かったようで分かりませんが、時代とともに解釈も変わります。千空さんの俳句も若い人に読まれていくかと思えます。千空さんはこれでいいということがなく、常にアバンギャルド(革新的な芸術運動)だったと思います。俳句は一番短い日本を代表する文学だと、世界で言われているときに、風土俳人の俳句を青森から発信していくのは後世に意味のあることだと思えます。

齋藤 若い人で俳句に興味をもって人が出てきていますから、千空俳句の読者がふえると予想しています。

—— そうあって欲しいですね。千空さんは「作品と評論は両輪だ。評論がなければ作品は広がらない」と言っていました。千空論をいつも提示していかなければならないと思います。皆さんに千空研究を発信して欲しいと願っています。今日は長い時間ありがとうございました。

(3月21日、青森文芸出版の事務所で)

特集 戦後青森県の文学状況

俳句界の動向

成田千空

昭和二十年七月二十八日夜、米国のB29爆撃機による青森市空襲があり、一時間ほどの爆撃で市街のほとんどが焼失し、死者七三名(公表)、他、数知れない負傷者を出した。空襲の直前まで青森俳句会の句会が行われていたが、その日から終戦まで会員の消息が不明の日が続いた。私は北津軽郡飯詰村(母の故郷・現五所川原市)に移住したから誰とも連絡がとれなかった。

八月十五日に終戦となり、ひと月ほど後に青森の町に出て、焼跡のバラック建ての本屋で吹田孤蓬と出会った。お互いに無事であったことを喜び、彼は私をバラック建ての食堂に誘い、洋食らしいものをおごってくれた。青森の句会は孤蓬の細君登美子の実家の焼け残りの土蔵で行われていること、近く結社誌「暖鳥」を創刊することなど、無精髭の顔を紅潮させて語るのであった。「暖鳥」創刊号は昭和二十一年十月に出た。薄っぺらな俳誌であるが、活版印刷で意気込みが感じられた。刊行物の大半はガリ版印刷の時代であった。表紙は同人宮川翠雨が一冊一冊墨筆したもので、薄墨の

筆跡がよかった。ただ編集後記はなぜか濃い墨で塗りつぶされていた。代表と編集者の意見が衝突した結果と思われた。そもそも青森俳句会は俳句には珍しく同人句会であり、相互批評が活発で、時には辛辣であった。吹田孤蓬、柿崎無為、西沢赤子、宮川翠雨、田辺天涯、千葉菁実、福田空朗、佐藤正夫、中田草上、福土行思、小田原雪層、前田水馬、工藤忠一郎、成田千空などが主要メンバーであった。私がこの会に参加したのは昭和十八年、太平洋戦争の真最中で孤蓬に誘われた。その二年前に東京の軍需工場で働いていたのだが、病気で帰郷して俳句をはじめ、高松玉麗主宰の松涛社で郷土主義の俳句を学んだ。孤蓬は当時、松涛社の幹事であったが、玉麗と衝突して松涛社から脱会して青森俳句会に参加。ここでも忽ち幹事役となり活動していた。青森俳句会は青森市内の五つほどの俳句結社が解散して昭和十五年に超結社の同人制による結社をつくり上げたのだが、運営が難渋していた。孤蓬が参加して息を吹き返し、県俳句界の新しい潮流となった。孤蓬は京都大学を卒業して吹田登美子と結婚し、登美子の実家の砂糖問屋の専務をしていた。京大時代は飯田蛇笏の長男の飯田鵬生と同級で、鵬生を中心に句会をやっていたという。俳壇史には残っていないが、新興俳句の発生源である京大俳句会が特高警察の弾圧で崩壊した時代に、鵬生を中心とする句会が京大に残っていたのである。その時代を呼吸していた孤蓬の存在が青森俳句会に及ぼした影響は大きい。青森俳句会は彼を中心に動き、句会は俳句論を越えて文学論や芸術論に発展するのが常であった。当時、二十代になったばかりの私の俳句は彼らの批評に晒された。宮川翠雨は鈴木翠軒の

高弟で、伝統書道に新風をもたらす存在であったが、一方、青森高校の教師として生徒達の文芸活動を指導し、寺山修司、京武久美、今ミキ、未津きみ、三浦錦、佐々木とみ子らを育成した。みな「暖鳥」の初期に台頭した新人たちである。この人たちは後に、俳句から詩や小説や演劇へ移って行った人が多く、又、創刊同人たちも書や絵に情熱を傾けている人が中心的存在で、「暖鳥」は俳句結社でありながら、自由な芸術志向の基地のようであった。寺山修司の出現はその最たるものであろう。戦争の時代から貧しくても自由な世界に転換した時代の特徴と見られる。新谷ひろしたちの弘高「かたくり」句会、寺山修司たちの青高「牧羊神」句会、八高出身の上村忠郎たちの「青年俳句」会等、今日では考えられない少青年層の盛んな文芸志向である。

俳句界の潮流から見れば、花鳥諷詠、写生を主張する高浜虚子の「ホトトギス」系が主流をなして、本県でも増田手古奈主宰の「十和田」が戦中、戦後を通じて正岡子規以来の伝統を守っていた。手古奈は東京帝大と医局時代を通じて水原秋桜子、高野素十らと直接虚子の指導を受けて俳人となり、大鰐に医院を開業しながら、本格的な写生俳句を本県に導入した人といっよ。「暖鳥」の人たちは反ホトトギスの臼田亜浪主宰「石楠」系の人が多く、「十和田」には批判的であった。本県には萩原井泉水や河東碧梧桐の新傾向俳句の潮流もあるが、戦後以来次第に鳴りをひそめるに至った。「暖鳥」では創刊の頃、石楠同人で東北大学教授の永野孫柳を選者に立てて、度々研究会をひらいている。昭和二十一年十一月号の「世界」に発表

された桑原武夫の第二芸術論の例句は同じ大学の孫柳が提供したものであった。

県南には旧派の伝統を守って今も続いている八戸俳句倶楽部があり、その風土を肯定しつつ、新たな時代の俳句を模索するいくつかの句会が競い立っていた。島守静翠居、音喜多古剣、阿部思水、法師浜桜白ら新派俳句の一団が形成されていた。戦後、加藤憲曠、豊山千蔭、村上しゅら、谷藤砂塵、上村忠郎らが台頭して、「八戸俳句会」をつくり、同人俳誌「北鈴」を創刊した。千蔭やしゅらは「青森俳句会」の在り方に注目して、さかんに交流した。これに十和田市の米田一穂も加わり、津軽と県南の有志によるアンソロジーが五巻出版された。のみならず「北鈴」は風土性俳句の旗幟を掲げて、昭和三十年から始った角川俳句賞に挑み、しゅら、麦青、一穂、憲曠、静香らが次々と受賞した。又、「萬緑」「寒雷」「鶴」「あざみ」「濱」といった中央俳誌の結社賞受賞者も輩出した。戦後の画期的な県俳句界の動向とあってよいであろう。

東奥日報主催の青森県俳句大会が戦後早々から始まり、特に昭和二十六年、中村草田男が特別選者として招かれ、県下から三百人の俳人が参加した。以来、加藤楸邨、山口誓子、水原秋桜子、西東三鬼、秋元不死男、大野林火等々、第一線の俳句作家が来青して今日まで続いている。だがかつての勢いが見られないのはなぜであろう。

〈なりたせんくう／俳人・「萬緑」代表／五所川原市在住〉

千空 倭武多の俳句

【あ行】

あけひろげ倭武多狂ひは童子より
荒御魂こもれる倭武多とぞおもふ
板子一枚倭武多太鼓のやむなき夜
いや高く下眼の相の立倭武多
打ち群れて帷幕の如き倭武多小屋
打つて出で大路の幅に倭武多燃ゆ
鬱蒼と岩木嶺暮るるねぶたかな
海やまの更けて倭武多のなごり笛
海よりの風澎湃と倭武多小屋
大倭武多小屋海鳴りの夜もあらむ

【か行】

風の耳星の眼倭武多もう流れる
紙白く寡黙のくにの倭武多小屋
狂乱のねぶたに瘦せて戻りけり
金襴の袋に父のねぶた笛
雲あれば雲突くばかり立倭武多
煌々とねぶた過ぎ去り白き母
声こぞるねぶたの修羅場正念場
ことごとく拙を蔵せり立倭武多
この町を折伏のさま立倭武多
怵へるし雨轟然と倭武多果つ
今生を燃えよと鬼の倭武多来る
今生を燃えよと鬼の立倭武多
混沌の夜の底から倭武多引く

【さ行】

坂がちに勢ふ小ねぶた大ねぶた

酒滲みて音の決まりしねぶた笛
雑草の新緑に映え町倭武多
雑草の真みどりに映え町ねぶた
白倭武多かもめも白き翼を張る
白張りの倭武多より紙こぼれけり
白無垢の倭武多静かに満を持す

次郎の笛太郎のねぶた太鼓かな
心頭やねぶた太鼓の撥は鞭
過ぎゆくもの倭武多太鼓を臍に聞く
迫りきて絶壁となる立倭武多

蒼茫と倭武多の首途塩むすび
蒼茫と日暮れぬ倭武多見にゆかん

【た行】

立倭武多火柱のごと灯りけり
立倭武多とり巻く修羅の笛太鼓
立倭武多火柱のごと灯りけり
立倭武多懦夫とても身を立て直す
立倭武多近づく館日は赤し
たましひをうばひて去りし倭武多かな
月空に納めの倭武多振られけり
ちびっ子多き町内ねぶた目出度しや
戸板一枚倭武多太鼓のやむなき夜

【な行】

肉を焼く匂ひや鬼の立倭武多
ねぶたまの闇肅々と立倭武多
倭武多待つ生地地べた平かに
倭武多いま沸点にあり鈴しぐれ
倭武多酒酌むや地べたの寧ぎに
倭武多師にうぶすなの海青きかな
倭武多師の精魂こもる小屋いくつ
倭武多師も倭武多も雌伏幾月ぞ
倭武多先陣女ばかりの大太鼓

倭武多太鼓とゞろとゞろと人いそぐ

倭武多綱握るや荒く年経たり

倭武多張る乙女子の指しなやかに

倭武多日の幕上るごと豪雨やむ

倭武多先づ闇を痺らす大太鼓

倭武多待つ生地の地べた平かに

倭武多みな何を怒りて北の闇

倭武多見る人の歩みにしたがへり

倭武多見る浴衣の袖をたくしあげ

倭武多見る杏子歎喜の唇赤く

倭武多見る人の歩みにしたがへり

ねぶた百流れ光陰流れ去る

ねぶた笛流るるなべに兄逝けり

ねぶた笛聴きあて遠き父の笛

ねぶた衣のこぼれ鈴この拾ひもの

ねぶた曳き褒美の駄菓子塩むすび

ねぶた燃え夕空は雨暍へをり

ねぶた燃え榊なき人の群れとなる

脳天に掛矢の一打立倭武多

【は行】

引き潮の力もて去る倭武多かな

人の子やねぶたの鈴を売り歩く

降る雨の血の雨となるねぶたかな

北狄の威を身の丈に立倭武多

星荒く倭武多祭の更けてけり

星微塵北を守りの立倭武多

【ま行】

町はいま人の荒波立倭武多

祭近づく火口のやうな倭武多小屋

真暗な山から鬼の倭武多来る

萬燈のかゞやく倭武多はるかより

群肝のざはめく倭武多祭かな

【や行】

八雲立ちとどろきわたる倭武多かな

山鳴りのやうなねぶたの大鼓かな

【ら行】

爛々と会ふが別れの倭武多かな

*句集以外の作品も含まれています。

【作品鑑賞を読む】⑧

雨の日は雨を力に大青田

千空

掲出句を一読したとき、誰しも想起するのは次の作品だろう。

大粒の雨降る青田母の故郷 『地霊』

この句については既に第5回(テーマ「風土」)

で採り上げたため再度言及することはしないが、

千空作品を語るとき必ず組上に上がる、千空初期の代表作(昭和22年作)である。

一方、掲出句は、千空最後の句集となる「十方吟」に所収されたもの。二つの作品の成立期

には半世紀以上の時の隔たりがあるが、作品の

モチーフはほぼ同一である。千空が当初からそ

のことを意識して掲出句を創作したとは必ずし

も言えないが、作品成立後にも気付かなかった

ということはあるまいだろう。では千空自身

はどんな思いで、この句を詠んだのだろうか。

そこが興味深い。

二つの作品を比較すると、次のような違いが

目に付く。

「大粒の」の句は、千空自身が語っているよ

うに、「生き生きとした大地の息吹を感じ、何

の作でもないままに(中略)生まれ」た作品で

ある(角川学芸出版 成田千空著「俳句は歓びの文

学」より)。それに対し、掲出句には或る意味

での「作為」が感じられる。作為という表現が

適切でないなら、「作者の意思」とでも言うべ

きだろうか。

前者は、半ば無意識のうちに、青森空襲の惨

劇に遭遇して蝕まれた心とその蘇生が作品の

バックボーンとなっており、悠久かつ深遠な存

在とでもいふべき自然によって千空の心が癒さ

れていく様子がみてとれるが、後者にはそのよ

うな暗さはない。あるのは、自然に寄り添い、

それを活かして今日を生きていこうとする人間

の積極的な営為に対する信頼だろう。誤解を恐

れず二項対立的な構図を描けば、「自然賛歌に

よる人間不信からの脱却vs人類の営みへの信

頼」とでもいえようか。

その変化をもたらしたのは、もちろん千空

自身の俳句人生および実人生の歩みだろう。そ

して、そうした人間肯定は、そう簡単に成立し

たものではない筈だ。少なくとも、決して軽い

ものではない。真摯にかつ前向きな生き様が

あったからこそその明るさや信頼がそこにあり、

それが作品となって結実したものだと思える。

深谷義紀

*ネット「詩客SHIKAKU」戦後俳句を読む

成田千空の句(2012年8月31日)より

『成田千空伝——大粒の雨降る青田母のくに——』
『合本 成田千空句集』

出版記念会開かれる

『成田千空伝』と『合本成田千空句集』の出版記念会が7月28日(日)午後2時半から青森市新町アラスカで開かれた。あおもり文芸さろんが主催し、さろん会員と千空研究会会員など33名が出席して出版を祝い、在りし日の千空さんを偲んだ。



館田さん(右)と米田さん

かと思ひます。ゆっくりと千空さんの思い出を語り合っていたきたい」とあいさつした。

青森県郷土作家研究会代表理事・館田勝弘さんが「すばらしい評伝ができました。工業学校の新聞『青工』や『月刊東奥』など、若い時の千空さ

んの文才が紹介されています。また、千空さんが残した原稿や日記など未発表の資料が使われていて発見があります。五所川原からの視点で描かれていることにも特色があります。これからも書いてほしいテーマがたくさんあります」とお祝いの言葉を述べた。

つづいて俳文学会会員の米田省三さんが「没後12年、こんなに早く評伝がでる俳人もめずらしいと思います。早いことの利点は故人を知る人がいること、日記などの資料が残っていることです。この利点を生かした評伝となっています。「今日を断ちわたしの前にあるレモン」は、萬緑県支部誌『未来』に掲載され議論となった印象深い句です」とお祝いの言葉を述べた。

『成田千空伝』の著者・齋藤美穂さんと『合本成田千空句集』の著作権者・成田市子さんに花束が贈られた。



お礼の言葉を述べる
齋藤美穂さん(右)と成田市子さん

齋藤さんが「五所川原の千空さんを描きたいと考えました。自分なりの千空を書けばいいと言われたので書きあげることができました。調べると千空さんの魅力が見えて来て夢中になりました。みなさんのおかげです。ありがとうございました」とお礼の言葉を述べ

た。

成田市子さんは「きょうは本当によろしいです。みなさんのお陰で本ができて、千空も喜んでいいると思ひます」とお礼の言葉を述べた。

俳人の高森ましらの発声で乾杯に入り、和やかな懇談が続いた。あまり熱心な会話が続けて予定していたスピーチを割愛した。あちこちで別れを惜しむ光景がみられるなか、午後5時半ごろ散会した。



出席者氏名

(敬称略)

成田千空伝著者

齋藤美穂

合本句集著作権者

成田市子

会津明郎、荒関映子、荒谷信子、石崎志亥、一戸香津江、一戸崇矢(陸奥新報)、一戸鈴尾形せいじ、小笠原眞、上條勝芳、木村捷則、兼平一子、兼平あゆみ、齋藤和麻、齋藤純子、櫻庭利弘、佐々木信也、佐々木達司、世良啓、館田勝弘、佐藤武、白鳥崇、高森ましら、土田紫翠、成田圭子、野沢省悟、藤田久美子、米田省三、山内ひろ子、山本こう女、吉田州花。

寄贈感謝

浅利康衛さん(青森市) 『まほろば』6・7・8月号

原稿を募集しています

第20号で終刊となります

会報『千空研究』の原稿を募集しています。執筆頂ける方はお早めに原稿をお届けくださるようお願いいたします。

1. 調査・研究に関するもの(4000字以内)
 2. 回想の成田千空(2000字以内)
- 締め切り 第20号は10月末。
送り先 (下段発行所、青森文芸出版あて)

*Eメールで送信くださる場合

sasaki@a-bungei.co.jp

会費領収しました(第18号以降、敬称略)

会津明郎、高森ましら、松宮梗子、矢須恵由

『成田千空伝―大粒の雨降る青田母のくに―』齋藤美穂
亡くなってから12年、「東北に千空あり」といわれた俳人の評伝ができました。太宰治、中村草田男、寺山修司、金子兜太との関わりなど興味深い一冊です。

定価2500円＋税

『合本 成田千空句集』

俳人 成田千空研究会編

千空句集が1冊になりました。「総索引」によって探している句が見つけられます。20歳で俳句を始めて注目され、77歳で蛇笏賞、86歳で亡くなるまでの作品を収める。

定価2500円＋税

青森文芸出版

*千空研究会会員割引(2割引)の期限は12月27日まで。
お求めはお早めに。

会員名簿(64名)

- 〈青森市〉 浅利康衛、荒谷信子、齋藤光子、佐藤陽子、高森ましら、中嶋義雄、成田市子、西谷ともえ、野沢省悟、野村正彦、浜田しげる、未津きみ、吉田州花
- 〈弘前市〉 阿保子星、石崎志亥、泉 風信子、市田由紀子、鎌田義正、後藤 隆、佐藤 繁、館田勝弘、土田紫翠、成田圭子、三上弘之
- 〈黒石市〉 鳴海顔回
- 〈藤崎町〉 清水雪江、世良 啓
- 〈八戸市〉 上條勝芳、小林凡石、仁科源一、藤田健次
- 〈十和田市〉 米田省三
- 〈五所川原市〉 会津明郎、荒閑映子、一戸 鈴、葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、浜田十三、松宮梗子、山内ひろ子
- 〈板柳町〉 木村玲子
- 〈中泊町〉 外崎文夫
- 〈つがる市〉 兼平一子、工藤清泰、中村雅之
- 〈深浦町〉 草野力丸、山本こう女
- 〈岩手県盛岡市〉 瀬川君雄
- 〈茨城県那珂市〉 永山憲子、寺門資子、矢須恵由
- 〈茨城県水戸市〉 糟谷雅枝、小泉光子
- 〈茨城県日立市〉 高井まさ江
- 〈千葉県流山市〉 藤壁まさ志
- 〈神奈川県横浜市〉 許勢元貞
- 〈大阪市〉 川東郁代

☆北極星☆

○7月28日、『成田千空伝』と『合本成田千空句集』の出版記念会が開かれました(前ページ参照)。市子夫人(92歳)と妹・荒谷信子さん(95歳)も参加され、お2人ともお元気で、みんなと和やかに懇談されていました。○研究会も今年で解散となります。常連の執筆者3人による座談会「千空研究―これまで・これから」として、あゆみをまとめていただきました。

○今回は「佞武多の俳句」を取り上げてみました。句集に入っているのはわずか29句だけ。「あけひろげ佞武多狂ひは童子より」と詠んだ千空にしては少なすぎるので、雑誌や句帖からも拾いました。習作も含まれているので「こんな句まで入れて」と千空さんに怒られそうです。○暑い日が続いています。五所川原も35度と記録的です。老体には堪えるので、午後はクーラーのある部屋に避難しています。みなさんも健康にはご注意ください。この号が届くころにはねぶたも終わり、秋風が吹いているかともえは、千空句の評について。間接的に千空を語る資料が見つかっています。

2019年8月20日発行
会報『千空研究』第19号

非売品(会員配布)

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木 達 司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

TEL 0173-35-5323
FAX 0173-35-8414